

関係各位

京都府病虫害防除所長
(公 印 省 略)

病虫害発生予察情報について

下記のとおり発表しましたので送付します。

病虫害発生予報第5号（7月）

予報の概要

作物名	病虫害名	予想発生量 〈平年比（前年比）〉
イネ	葉いもち	<u>やや多</u> （やや多）
	紋枯病	並（並）
	セジロウカ	<u>やや多</u> （多）
	ツマグロヨコバイ 斑点米カメムシ類	並（並） <u>やや多</u> （やや多）
ダイズ、 アズキ	アブラムシ類とウ イルス病	やや少（少）
ナシ	黒斑病 黒星病 ハダニ類	<u>やや多</u> （やや多） <u>多</u> （多） 並（多）
ブドウ	べと病	<u>多</u> （多）
カキ	うどんこ病	並（やや少）
カンキツ	ハダニ類	<u>やや多</u> （やや多）
果樹全般	カメムシ類	山城 並（やや少） 丹波 <u>やや多</u> （並） 丹後 並（やや少）
チャ	炭そ病	山城 並（並） 丹波 <u>やや多</u> （やや多） 丹後 <u>やや多</u> （やや多）
	チャノコカクモンハマキ	山城 <u>やや多</u> （やや多） 丹波 並（やや少） 丹後 並（並）
	チャノホリガ	山城 やや少（並） 丹波 並（並） 丹後 並（並）

作物名	病虫害名	予想発生量 〈平年比（前年比）〉
チャ	カンザワハダニ	山城 やや少（少） 丹波 やや少（並） 丹後 <u>やや多</u> （並）
	チャノキロアサミウマ	山城 やや少（並） 丹波 並（並） 丹後 <u>やや多</u> （やや多）
	チャノミドリ ヒメヨコバイ	山城 <u>多</u> （並） 丹波 並（少） 丹後 並（並）
	クワシロカイガラムシ	山城 並（並） 丹波 <u>やや多</u> （多） 丹後 <u>多</u> （やや多）
果菜類	疫病・褐色腐 敗病	並（並）
	うどんこ病 アブラムシ類と モザイク病	並（並）
	アザミウマ類 ハモグリハエ類	<u>やや多</u> （並） 並（並）
ウリ類	べと病 炭そ病	<u>やや多</u> （並） 並（並）
キュウリ、トウ ガラシなど	斑点細菌病	<u>やや多</u> （やや多）
ネギ	ネギアサミウマ	<u>やや多</u> （やや少）
	ネギハモグリハエ	やや少（やや多）
野菜全般	ハダニ類	<u>やや多</u> （やや多）

目次

予報の概要	1
予報本文	2
今後注意すべきその他の病虫害等	14
参考 I 気象予報	16
II 用語の定義	16
III 予報本文の見方	17
IV 短期暴露評価の実施に伴う農薬の変更登録について	18

イネ

1 葉いもち

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

(1) 6月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。

項目	本年	平年値
発生ほ場率(%)	0.0	1.0
発病株率(%)	0.0	0.1

(2) 病害虫調査協力員から発生が報告されている（+）。

(3) B L A S T A M（いもち病発生予察システム）によると、感染好適条件が6月中旬以降に出現している（+）。

(4) 長期持続型箱施用剤の普及率が高まっている（-）。

(5) 向こう1ヶ月の気温は平年並または低く（+）、降水量は日本海側で平年並または少なく（-）、太平洋側で平年並、日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 補植用苗が葉いもちの発生源となるので、放置したままの苗は早急に抜取り処分する。

(2) いもち病の発生は気象に大きく影響されるので、曇雨天が続く場合には注意する。

(3) ほ場の見回りを行い、肥料がムラ効きしているところを中心に、下葉に発病していないかどうか調べる。特に多肥田や山間、山沿いの水田では注意する。

(4) 平成25年度に中丹地域、平成26年度に南丹地域の一部においてストロビルリン系薬剤（QoI剤）耐性菌の発生を確認した。耐性菌の発生地域ではいもち病に対するQoI剤の使用を中止し、他系統の薬剤（抵抗性誘導剤、MBI-R剤等）を使用する。QoI剤を使用したほ場で、防除効果の低下が疑われる場合は、他系統の薬剤で追加防除を行うとともに、速やかに病害虫防除所または、関係機関に連絡する。詳細は京都府病害虫防除所ホームページ（アドレス <http://www.pref.kyoto.jp/byogai/index.html>）を参照のこと。

2 紋枯病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

(1) 6月中旬現在、発生を認めていない。

(2) 前年8月の発生量は平年並。

項目	平成26年8月	平年値
発生ほ場率(%)	46.7	33.9
発病株率(%)	5.9	5.1

(3) 向こう1ヶ月の気温は平年並または低く（-）、降水量は日本海側で平年並または少なく（-）、太平洋側で平年並、日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 分けつ期ごろに水際葉鞘に発生し、その後水平、上位方向に進展する。

(2) 早植栽培で発生が多く、気温30℃前後で多湿条件が続くと多発する。

(3) 出穂20日前の発病株率が20%以上であれば薬剤散布を行う。散布は発病部である葉鞘によく付着するように株元を狙って行うようにする。なお、

- 穂いもちとの同時防除を考慮する。
 (4) 昨年多発したほ場では、深水管理をしない。
 (5) 窒素の多用を避け、過繁茂にならないよう施肥管理に注意する。

3 セジロウシカ

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 6月第3半旬現在、予察灯での誘殺を認めていない。
 (2) 6月中旬現在、本田での発生は平年比やや多い（+）。

項目	本年	平年値
発生ほ場率(%)	6.7	1.0
虫数(頭)	0.1	0.02

※本田20回すくい取り調査。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 梅雨期に海外から飛来し、吸汁加害する。
 (2) 梅雨前線の活動が活発化すると多飛来することがあるので注意する。
 (3) 7月中旬以降、ほ場を見回り、株当たり10頭以上の発生を認めた場合は防除する。なお、幼虫は株元に生息しているので、薬剤が株元までかかるよう丁寧に散布する。

4 ツマグロヨコバイ

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、本田で発生を認めていない（平年並）。

項目	本年	平年値
発生ほ場率(%)	0.0	5.4
虫数(頭)	0.0	0.5

※本田20回すくい取り調査。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 直接吸汁加害する他、萎縮病等を媒介する。

5 斑点米カメムシ類

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、本田及び畦畔での発生量は平年並であるが、一部地域の畦畔雑草で多発している（+）。

項目		本年	平年値
本田	発生ほ場率(%)	3.4	5.9
	虫数(頭)	0.03	0.14
畦畔	発生ほ場率(%)	37.9	46.2
	虫数(頭)	3.0	4.1

※20回すくい取り調査。

- (2) アカヒゲホソミドリカスミカメの予察灯への誘殺数は、京田辺市で平年並、亀岡市及び京丹後市で平年比やや多い（+）。

場所	本年	平年値
京田辺市	0.0	5.1
亀岡市	10.0	5.0
京丹後市	16.0	9.4

※5月第6半旬～6月第3半旬までの合計誘殺虫数(頭)。

(3) アカスジカスミカメの予察灯への誘殺数は、京田辺市で平年並、亀岡市で平年比多く(+)、京丹後市で平年比やや少ない(-)。

場所	本年	平年値
京田辺市	0.0	0.2
亀岡市	20.0	5.4
京丹後市	6.0	14.2

※5月第6半旬～6月第3半旬までの合計誘殺虫数(頭)。

(3) 向こう1ヶ月の気温は平年並または低く、降水量は日本海側で平年並または少なく、太平洋側で平年並、日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 稲穂を吸汁加害し、斑点米の原因となるカメムシ類には多くの種類がいるが、特に、カスミカメムシ類による被害が増加している。
- (2) 水田周辺のイネ科雑草の穂を餌にして増殖し、本田へ侵入するので、草刈りを行い、イネ科雑草の出穂を防ぐ。
- (3) 草刈りは出穂2～3週間前と出穂直前の2回行うと効果的である。1回で済ませる場合は、出穂10日前までに行う。なお、刈取り時期が遅れると逆効果になるので注意する。
- (4) 近年多発し問題となっている地帯では穂揃期と傾穂期の防除(共同、一斉)が有効である。
- (5) 平成22年に、府内で初めてミナミアオカメムシの発生を確認した。平成26年までに山城地域と丹波地域の一部で本種の発生を確認している。本種は、他の斑点米カメムシ類に比べて体が大きく吸汁量が多いため、少数でも被害が大きくなるので注意する。

※今後注意すべきその他の病害虫等はp14～15を参照

ダイズ、アズキ

1 アブラムシ類とウイルス病

予報内容 発生量：平年比やや少ない(前年比少ない)

予報の根拠

- (1) 6月第3半旬現在、アブラムシ類の黄色水盤での誘殺数は平年比やや少ない(-)。

項目	本年	平年値
黄色水盤誘殺数(頭)	43	288

*誘殺数(頭)：5月第4半旬～6月第3半旬の合計値

- (2) 向こう1か月の気温は平年並または低く(-)、降水量は日本海側で平年並または少なく、太平洋側で平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) ほ場周辺のマメ科雑草を除去する。
- (2) ウイルス病はアブラムシ類が伝搬するので、発生初期の防除に留意する。
- (3) 種子塗布剤、粒剤の使用も有効である。

※今後注意すべきその他の病害虫等はp15を参照

果樹

1 ナシ 黒斑病

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年比やや多い)

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、発生量は平年比やや多い(+)

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	2.7	2.7

(2) 向こう1か月の気温は平年並または低く、降水量は日本海側で平年並または少なく、太平洋側で平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 6月から7月の梅雨期が感染最盛期であり、雨が降り続くと被害が多くなる。
- (2) 袋掛けは早めに行い、袋掛けの直前に必ず薬剤を散布する。

2 ナシ 黒星病

予報内容 発生量：平年比多い（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在の発生量は平年比多い（+）。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	8.2	1.1

(2) 向こう1か月の気温は平年並または低く（+）、降水量は日本海側で平年並または少なく、太平洋側で平年並と予想されている。

(3) 現地で発生が目立つ病害虫として、病害虫調査協力員から報告されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 雨が続き、涼しい年に発生が多くなる。
- (2) 夏から秋に、徒長枝に発病しやすい。

3 ブドウ ベと病

予報内容 発生量：平年比多い（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在の発生量は平年比多い（+）。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	2.8	0.6

(2) 向こう1か月の気温は平年並または低く（+）、降水量は日本海側で平年並または少なく、太平洋側で平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 雨が多く、気温が低めに経過すると多発しやすい。
- (2) ハウス栽培では、過繁茂を避け通風をよくする。

4 カキ うどんこ病

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在の発生量は平年並。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	11.3	14.7

(2) 向こう1か月の気温は平年並または低く（+）、降水量は日本海側で平年並または少なく、太平洋側で平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 6月から7月に雨が多いと、葉に被害が現れやすい。
- (2) 冷夏では、夏場も発病が続く。

5 ナシ、カンキツ ハダニ類

予報内容 発生量：ナシ 平年並（前年比多い）
カンキツ 平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

（1）6月中旬現在の発生量は、ナシでは平年並、カンキツでは平年比やや多い（+）。

作物	項目	本年	平年値
ナシ	寄生葉率(%)	4.1	4.4
カンキツ	寄生葉率(%)	14.3	12.9

（2）向こう1か月の気温は平年並または低く（-）、降水量は日本海側で平年並または少なく、太平洋側で平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）梅雨明け以降、急激に増加するので注意する。
- （2）年間世代数が多く、薬剤抵抗性がつきやすいので、同一系統の薬剤を連用しない。
- （3）合成ピレスロイド系薬剤を連用すると、ハダニ類が多発する場合がありますので注意する。

6 果樹全般 カメムシ類（チャバネアオカメムシ、クサギカメムシ等）

予報内容 発生量：山城、丹後 平年並（前年比やや少ない）
丹波 平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

（1）チャバネアオカメムシの予察灯での誘殺数は京田辺市、京丹後市で平年並、亀岡市で平年比やや多い（+）。

場所	本年	平年値
京田辺市	0	12.3
亀岡市	1	0.5
京丹後市	7	20.1

*誘殺数(頭)：5月第4半旬～6月第3半旬の合計値

（2）チャバネアオカメムシのフェロモントラップでの誘殺数は京田辺市で平年並、亀岡市で平年比やや多く（+）、京丹後市で平年比少ない（-）。

場所	本年	平年値
京田辺市	1.0	3.3
亀岡市	17.4	12.3
京丹後市	0.0	6.1

*誘殺数(頭)：5月第4半旬～6月第3半旬の合計値

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）園外から侵入し、局地的に発生するので、特に山林などの隣接園では注意する。
- （2）ナシ、モモなどの無袋栽培やカキ、カンキツでは、被害が多くなる。

チャ

1 炭そ病

予報内容 発生量：山城 平年並（前年並）
 丹波 平年比やや多い（前年比やや多い）
 丹後 例年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

(1) 6月中旬現在の発生量は、山城で平年比やや少なく（－）、丹波で平年比やや多く（＋）、丹後で例年並。

地域	項目	本年	平年値
山城	発病葉数(m ² 当たり)	0.2	3.1
	発生ほ場率(%)	17.6	36.4
丹波	発病葉数(m ² 当たり)	4.5	2.0
	発生ほ場率(%)	100.0	44.3
丹後	発病葉数(m ² 当たり)	0.5	1.3
	発生ほ場率(%)	25.0	34.4

(2) 5月中旬の調査では感染源となる古葉での発生が山城、丹後で平年比（例年比）やや多く（＋）、丹波で平年並。

(3) 向こう1か月の気温は平年並または低く、降水量は日本海側で平年並または少なく（－）、太平洋側で平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 伝染源は、摘採されずに残った前茶期の病葉である。
- (2) 本病が感染するのは新葉に限られ、新芽生育期に降雨が続くと発生が多くなる。
- (3) 防除適期は、三番茶芽の第1～2葉開葉期である。

2 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比やや多い）
 丹波 平年並（前年比やや少ない）
 丹後 例年並（前年並）
 第2世代幼虫ふ化期：
 山城 7月第1半旬～7月第2半旬（平年比やや早い）
 丹波 6月第6半旬～7月第1半旬（平年比早い）

予報の根拠

(1) 6月中旬現在、第1世代の発生量は府内全域で平年（例年）並。

地域	項目	本年	平年値
山城	綴葉数(m ² 当たり)	0.4	0.6
	幼虫数(m ² 当たり)	0.0	0.2
	発生ほ場率(%)	11.8	10.4
丹波	綴葉数(m ² 当たり)	2.2	3.6
	幼虫数(m ² 当たり)	0.7	0.5
	発生ほ場率(%)	16.7	27.0
丹後	綴葉数(m ² 当たり)	0.0	0.7
	幼虫数(m ² 当たり)	0.0	0.2
	発生ほ場率(%)	0.0	3.1

(2) フェロモントラップへの誘殺数は、宇治市で平年並、綾部市で平年比少ない（－）。

(3) フェロモントラップへの誘殺盛期は宇治市で平年比やや早く、綾部市で平年比早い。

(4) 向こう1か月の気温は平年並または低く、降水量は日本海側で平年並または少なく、太平洋側で平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、第1世代成虫が6月下旬～7月上旬に発生し産卵する。4回世代を繰り返す。
- (2) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

3 チャノホソガ

予報内容 発生量：山城 平年比やや少ない（前年並）
丹波 平年並（前年並）
丹後 例年並（前年並）
第3世代幼虫ふ化期：
山城 7月第3半旬～7月第4半旬（平年比早い）
丹波 7月第4半旬～7月第5半旬（平年比やや早い）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在の発生量は山城で平年比やや少なく（－）、丹波、丹後で平年（例年）並。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生芽率(%)	3.1	10.7
	巻葉数(m ² 当たり)	0.0	0.1
	発生ほ場率(%)	63.6	22.1
丹波	寄生芽率(%)	－	31.5
	巻葉数(m ² 当たり)	1.2	0.4
	発生ほ場率(%)	16.7	25.3
丹後	寄生芽率(%)	19.0	36.3
	巻葉数(m ² 当たり)	1.8	0.0
	発生ほ場率(%)	50.0	21.9

－：摘採等により、芽の調査できず。

- (2) フェロモントラップへの誘殺数は、宇治市、綾部市ともに平年比やや多い（＋）。
- (3) フェロモントラップへの誘殺盛期は宇治市で平年比早く、綾部市で平年比やや早い。
- (4) 向こう1か月の気温は平年並または低く、降水量は日本海側で平年並または少なく、太平洋側で平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、5回世代を繰り返し、7月上中旬に第2世代成虫が発生し産卵する。
- (2) 卵は3～7日でふ化し、新芽を加害する。

4 カンザワハダニ

予報内容 発生量：山城 平年比やや少ない（前年比少ない）
丹波 平年比やや少ない（前年比やや多い）
丹後 例年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在の発生量は山城で平年比やや少なく（－）、丹波で発生を認めず（平年比少ない）、丹後で例年比やや多い（＋）。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生葉率(%)	12.5	9.9
	寄生虫数(100葉当たり)	71.0	66.0
	発生ほ場率(%)	75.0	57.9
丹波	寄生葉率(%)	0.0	6.8
	寄生虫数(100葉当たり)	0.0	41.0
	発生ほ場率(%)	0.0	46.7
丹後	寄生葉率(%)	12.5	5.2
	寄生虫数(100葉当たり)	71.0	17.8
	発生ほ場率(%)	75.0	34.4

(2) 向こう1か月の気温は平年並または低く、降水量は日本海側で平年並または少なく(+)、太平洋側で平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 繁殖力は10～30℃の範囲で高温の時ほど高いが、降雨により増殖が抑制される。
- (2) 通常、葉の裏側に生息するので、薬剤は葉裏にかかるよう丁寧に散布する。
- (3) 園をよく見回り、発生の多い園では二番茶摘採後に防除を徹底する。

5 チャノキイロアザミウマ

予報内容 発生量：山城 平年比やや少ない(前年並)
 丹波 平年並(前年並)
 丹後 例年比やや多い(前年比やや多い)

予報の根拠

(1) 6月中旬現在の発生量は山城で平年比やや少なく(-)、丹後で例年比やや多い(+)

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生・被害芽率(%)	14.2	26.0
	発生ほ場率(%)	91.7	83.9
丹波	寄生・被害芽率(%)	-	20.8
	発生ほ場率(%)	-	80.0
丹後	寄生・被害芽率(%)	21.0	10.0
	発生ほ場率(%)	100.0	75.0

-：摘採等により、芽の調査できず。

(2) 向こう1か月の気温は平年並または低く、降水量は日本海側で平年並または少なく(+)、太平洋側で平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に二番茶期以降に増加し、夏秋芽を吸汁加害する。
- (2) 多雨により発生は減少するが、生息密度が高いと多少の雨では影響が小さい。
- (3) 防除適期は、新芽伸育期である。
- (4) 発生の多い園では、三番茶芽の萌芽期と第1葉開葉期の2回散布の効果が高い。
- (5) 薬剤の使用に当たっては、同一系統の使用を避ける。

6 チャノミドリヒメヨコバイ

予報内容 発生量：山城 平年比多い(前年並)
 丹波 平年並(前年比少ない)
 丹後 例年並(前年並)

予報の根拠

(1) 6月中旬現在の発生量は山城で平年比多く(+)、丹後で例年並。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生・被害芽率(%)	3.0	0.7
	発生ほ場率(%)	33.3	11.1
丹波	寄生・被害芽率(%)	-	8.6
	発生ほ場率(%)	-	66.7
丹後	寄生・被害芽率(%)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	0.0

- : 摘採等により、芽の調査できず。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 二番茶期以降、発生が多くなる。
- (2) 防除適期は、新芽伸育期である。
- (3) 薬剤の使用に当たっては、同一系統の使用を避ける。

7 クワシロカイガラムシ

予報内容 発生量：山城 平年並（前年並）
丹波 平年比やや多い（前年比多い）
丹後 例年比多い（前年比やや多い）

予報の根拠

(1) 第1世代幼虫の発生量は、山城で平年並、丹波で平年比やや多く(+)、丹後で例年比多い(+)。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生株率(%)	22.5	20.4
	発生ほ場率(%)	68.2	62.5
丹波	寄生株率(%)	50.0	23.3
	発生ほ場率(%)	83.3	63.3
丹後	寄生株率(%)	66.3	12.5
	発生ほ場率(%)	100.0	18.8

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間3回（一部山間部では2回）発生する。
- (2) 園を見回り発生が多い園では注意する。
- (3) 第1世代の発生が多かった園では特に注意し、幼虫ふ化期の防除に留意する。世代が進むほど幼虫ふ化時期がばらつき、ふ化期間が長くなるため、第2世代の防除は2回散布の効果が高い。
- (4) 薬剤散布は株内部の枝に十分かかるように行う。

※今後注意すべきその他の病虫害等は p 15 を参照

野菜

1 果菜類 疫病・褐色腐敗病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

(1) 6月中旬現在、ナスでは褐色腐敗病の発生を認めていない。

項目	本年	平年値
発病株率(%)	0.0	0.0

(2) 向こう1か月の気温は平年並または低く(+)、降水量は日本海側で平年並または少なく、太平洋側では平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 水媒伝染するので、ほ場の排水に努める。特に降雨時の地表水を速やかに排

水する。

- (2) マルチを行って、はね上げ伝染を防ぐ。また、溝に落ちて浸水したと思われる蔓は摘除して、ほ場外へ持ち出し処分する。

2 果菜類 うどんこ病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、キュウリ及びナスで発生を認めていない（キュウリ：平年比やや少ない、ナス：平年並）。

作物	項目	本年	平年値
ナス	発病株率(%)	0.0	0.0
キュウリ	発病株率(%)	0.0	6.7

- (2) 向こう1か月の気温は平年並または低く、降水量は日本海側で平年並または少なく(+)、太平洋側では平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 初発生時期が早いと多発し、被害が大きくなる。
(2) トウガラシ類では、ハダニの被害と類似しており判断がつきにくいので十分注意する。
(3) 菌糸が組織内で増殖するため薬液が十分付着するよう、ていねいに散布する。

3 ウリ類 べと病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、キュウリでの発生は平年比多い(+)。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	22.5	1.8
発病株率(%)	33.0	11.5

- (2) 向こう1か月の気温は平年並または低く(+)、降水量は日本海側で平年並または少なく(-)、太平洋側では平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 病原菌は、多湿条件で侵入、まん延しやすい。
(2) 肥切れしたり草勢が衰えないように肥培管理に注意する。

4 ウリ類 炭そ病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、発生を認めていない。
(2) 向こう1か月の気温は平年並または低く(+)、降水量は日本海側で平年並または少なく(-)、太平洋側では平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 種子伝染する他、被害作物の残さ、資材等が伝染源となる。
(2) 夏秋作に発生しやすいので注意する。

5 キュウリ・トウガラシ 斑点細菌病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、キュウリでの発生は平年比多い(+)。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	5.5	0.0
発病株率(%)	14.0	0.0

(2) 向こう1か月の気温は平年並または低く、降水量は日本海側で平年並または少なく(－)、太平洋側では平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 降雨等により病原細菌が飛散し、葉及び果実の気孔等から侵入し発病する場が多い。
- (2) 曇雨天が続くと急速にまん延するので、気象の変化に注意する。
- (3) 発生してからでは防除が困難となるので、予防防除が重要である。

6 野菜全般 ハダニ類(チャノホコリダニを含む)

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年比やや多い)

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、ナスでの発生は平年並、キュウリでは平年比やや多い(+)。

作物	項目	本年	平年値
ナス	寄生葉率(%)	1.9	1.3
	発生ほ場率(%)	50.0	27.1
キュウリ	寄生葉率(%)	1.0	0.6
	発生ほ場率(%)	25.0	14.3

(2) 病害虫調査協力員から、ナス、トウガラシで発生が目立つとの情報が寄せられている。

(3) 向こう1か月の気温は平年並または低く、降水量は日本海側で平年並または少なく(+)、太平洋側では平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に葉裏に生息し、乾燥条件で発生しやすい。
- (2) 梅雨明け後急激に増殖するので、梅雨明け後の防除が大切である。
- (3) 雨よけ栽培では発生しやすいので十分注意し、発生初期の防除に留意する。

7 果菜類 アブラムシ類とモザイク病

予報内容 発生量：平年並(前年並)

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、アブラムシ類のナスでの発生は平年並～やや少なく(－)、キュウリでは平年並。

作物	項目	本年	平年値
ナス	寄生虫数(頭/葉)	0.08	0.14
	寄生葉率(%)	2.0	5.7
キュウリ	寄生虫数(頭/葉)	0.02	0.02
	寄生葉率(%)	1.5	1.1

(2) 6月中旬現在、キュウリでのモザイク病の発生を認めていない(平年並)。

項目	本年	平年値
発病株率(%)	0.0	1.3

(3) 6月第3半旬現在、アブラムシ類の黄色水盤での誘殺数は平年比やや少ない(－)。

(4) 向こう1か月の気温は平年並または低く、降水量は日本海側で平年並または少なく(+)、太平洋側では平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) アブラムシ類には直接吸汁加害するだけでなく、モザイク病を媒介するものもいる。
- (2) 通常、無翅虫で集団加害する。
- (3) 密度が高まると有翅虫が現れて分散・飛来し、発生が拡大する。
- (4) キュウリの急性萎凋症の発生の多いところでは、アブラムシ類の飛来に特に注意する。

8 果菜類 アザミウマ類

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、ナスでの発生は平年並、キュウリでは平年比やや多い（+）。

作物	項目	本年	平年値
ナス	寄生虫数(頭/葉)	0.24	0.27
	寄生葉率(%)	12.4	12.5
キュウリ	寄生虫数(頭/葉)	2.46	1.14
	寄生葉率(%)	57.5	34.6

- (2) 向こう1か月の気温は平年並または低く、降水量は日本海側で平年並または少なく（+）、太平洋側では平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 雨よけ栽培では発生が多くなるので注意する。
- (2) アザミウマ類には直接加害するだけでなく、ウイルス病を媒介する種もいる。
- (3) 本年5月、京都府南部地域の露地栽培トマトにおいて、ミカンキイロアザミウマが媒介するトマト茎えそ病（仮称）が確認された。

本病害はキク茎えそウイルス(Chrysanthemum stem necrosis virus: CSNV)に
る病害で、本病の防除にはミカンキイロアザミウマに対する薬剤散布や、
防虫ネット、UVカットフィルムによる物理的防除が効果的である。

詳細については、6月5日発表の発生予察特殊報第1号（トマト茎えそ病
（仮称））(<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tokusyuhol.pdf>)を
参照のこと。

9 ネギ ネギアザミウマ

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在の発生量は平年比やや多い（+）。

項目	本年	平年値
被害株率(%)	89.6	77.2
被害度	57.6	35.6

- (2) 向こう1か月の気温は平年並または低く、降水量は日本海側で平年並または少なく（+）、太平洋側では平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間、10世代以上くり返し、葉の表層を食害、かすり状の食害痕を残す。
- (2) 葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- (3) ネギの被害残さが発生源となるので注意する。
- (4) 本種は昨年6月以降、府内で発生を確認しているネギえそ条斑病を媒介する。

- (5) ネギえそ条斑病は、アイリス黄斑ウイルス(Iris yellow spot virus: IYSV)による病害で、本病の防除にはネギアザミウマに対する薬剤散布や、防虫ネットやUVカットフィルムによる物理的防除が効果的である。

詳細については、京都府病害虫防除所ホームページの情報（防除所ニュース

第5号、第6号) (<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/1233108010046.html>)
 や5月25日発表の発生予察注意報第1号(ネギアザミウマ・ネギえそ条斑病) (<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tyuiho201505.pdf>)を参照のこと。

10 果菜類 ハモグリバエ類

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

(1) 6月中旬現在、ナスでの発生は平年比少なく(－)、キュウリでは平年並。

作物	項目	本年	平年値
ナス	被害葉率(%)	0.2	4.4
	被害株率(%)	1.5	25.8
キュウリ	被害葉率(%)	3.5	4.5
	被害株率(%)	11.0	18.7

(2) 向こう1か月の気温は平年並または低く、降水量は日本海側で平年並または少なく(+)、太平洋側では平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 苗からの持ち込みを防ぎ、被害植物の残さは土中に埋めて処分する。施設栽培では、開口部に0.8mm目合いの防虫ネットを張る。
- (2) 黄色粘着ロールをハウス周囲及び開口部に展張する。
- (3) 発生を認めたら被害葉を取り除き、発生初期の防除に留意する。
- (4) 施設マルチ栽培では、マルチ上に落ちた蛹を掃き集めて処分する。

11 ネギ ネギハモグリバエ

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや多い）

予報の根拠

(1) 6月中旬現在の発生量は平年比少ない(－)。

項目	本年	平年値
被害株率(%)	10.4	53.4
被害度	3.0	18.2

(2) 向こう1か月の気温は平年並または低く、降水量は日本海側で平年並または少なく(+)、太平洋側では平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。
- (2) 作物残さは発生源となるので処分する。

※今後注意すべきその他の病害虫等はp15を参照

今後注意すべきその他の病害虫等

発生量等を予想していない病害虫について、発生生態及び注意すべき事項を掲載しています。

イネ

1 トビイロウンカ、コブノメイガ

6月第3半旬現在、トビイロウンカ及びコブノメイガの予察灯での誘殺を認めていない。いずれも海外飛来害虫であるため、今後梅雨前線の活動が活発化すると多飛来することがあるので、予察情報に十分注意する。

2 白葉枯病

- (1) 暴風雨などが予想される時は深水にするなど、極力葉の損傷を少なくするよう努める。
- (2) 窒素肥料の多用を避けるほか、茎立後、葉が濡れているときにはほ場に入らないなど注意する。

3 イチモンジセセリ（イネツトムシ）

6月第3半旬現在、丹後地域での発生が多い。晩植田や窒素過多の田で発生が多くなる。防除時期は7月下旬～8月上旬の幼虫ふ化期である。

4 フタオビコヤガ（イネアオムシ）

- (1) 6月第3半旬現在、南丹、中丹及び丹後地域で発生を認めている。山間・山沿い地域や集落周辺など、風通しの悪い水田で多発しやすく、曇雨天が多い年に発生しやすい。
- (2) 出穂前後に発生する世代の加害が多いと被害が出る場合がある。幼虫が4、5齢に成長すると摂食量が増加するため、被害が急激に拡大するので注意する。

5 イネクロカメムシ

- (1) 常発地では注意する。
- (2) 6月中旬から7月上旬が越冬成虫の水田への移動の最盛期であり、この時期の薬剤防除が最も有効である。ほ場をよく観察し、3株に1頭（幼虫を含む）以上の発生を認めたら防除を実施する。

ダイズ、アズキ

1 白絹病

- (1) 本病は酸性土壌で発生しやすいため、植え付け前に石灰を施用し、土壌酸度を矯正する。
- (2) 未熟な有機物の施用は、本病の発生を助長する。生ワラや緑肥作物等をすき込んだ場合は、十分に腐熟化してから、は種する。
- (3) 土壌中に残存した菌核が第一次伝染源となるので、前年発病したほ場は連作を避ける。
- (4) 菌核は3～4ヶ月湛水すると死滅するので、水稻を含む輪作が有効である。

チャ

1 ツマグロアオカスミカメ

一番茶期に被害を受けた地域では、新芽の萌芽期から開葉期に十分注意する。

2 チャトゲコナジラミ

平成27年6月中旬の巡回調査で、府内全域で発生を確認した。本種の農薬による防除適期は若齢幼虫期（7月第中下旬）である。成虫発生期の散布では密度抑制効果が不十分であるため、成虫の飛翔が落ちついた頃を見計らって薬剤散布を行う。

野菜

1 褐斑病（キュウリ）

発生すると被害が大きいので、夏秋キュウリでは注意し予防に努める。

2 タバコガ類

果実に食入すると散布薬剤の薬効が低下するので、早期発見に努め、食入前及び若齢期の防除に留意する。

参 考

I 近畿地方 1 か月予報 (6月20日から7月19日までの天候見通し)

平成27年6月18日
大阪管区气象台発表

＜予想される向こう1か月の天候＞

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または低い確率ともに40%です。降水量は、近畿日本海側で平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、低い確率60%です。

＜向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)＞

	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気 温	40	40	20
降 水 量 (近畿日本海側)	40	40	20
降 水 量 (近畿太平洋側)	30	40	30
日 照 時 間	30	40	30

病虫害防除所では上記の天候の1か月予報の表現を「向こう1か月の気温は平年並または低く、降水量は日本海側で平年並または少なく、太平洋側では平年並、日照時間は平年並と予想されている」としました。

II 用語の定義

1 半月のとり方

	第1半月	第2半月	第3半月	第4半月	第5半月	第6半月
各月の	1～5日	6～10日	11～15日	16～20日	21～25日	26～最終日

2 発生量 — — — 病虫害の発生程度と広がり両面を加味したものをいう。

3 平年値 — — — 原則として過去10か年の平均とする。
データが10年に満たない場合は例年値とする。

4 平年値との比較

1) 時期

平年並	平年値を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
やや遅い	平年値より3～5日遅い
早い	平年値より6日以上早い
遅い	平年値より6日以上遅い

2) 量(発生量、発生面積等)

平年並	平年値並の発生で10年間に4回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10年間に2回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10年間に2回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10年間に1回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10年間に1回程度しか発生しない量

Ⅲ 予報本文の見方

「予報本文」の見方をチャノコカクモンハマキを例に示します。

1 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比やや多い）
 丹波 平年並（前年並）
 丹後 例年並（前年並）

- ・「予報内容」は、今後の病害虫発生状況や発生時期の予測を平年比で示しています。
- ・平年比の見方は、「Ⅱ 用語の定義、4 平年値との比較」を参照してください。
- ・（ ）内の前年比は予想月の前年の発生量（時期）との比較です。
- ・必要に応じて地域別に示します。

予報の根拠

- （1）前年10月の発生量は、山城、丹波、丹後で平年並の発生。
- （2）4月中旬現在、山城で平年比多く（+）、丹波、丹後で発生を認めていない（平年（例年）並）。

地域	項目	4月の調査結果	4月 平年値
山城	綴葉数(/㎡)	3.0	0.1
	幼虫数(/㎡)	0.5	0.0
	発生ほ場率(%)	22.7	3.7
丹波	綴葉数(/㎡)	0.0	0.5
	幼虫数(/㎡)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	11.7
丹後	綴葉数(/㎡)	0.0	0.0
	幼虫数(/㎡)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	0.0

- ・「予報の根拠」として直近の巡回調査のデータの中で主だったものを示しています。平年値も記載しているので、防除等の目安としてください。

- （3）4月中旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は、宇治で平年比少ない（-）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）幼虫で越冬し、春に羽化した成虫が発生源となるので、前年秋に多発した園では注意する。
- （2）通常、第1回目のふ化期は5月末～6月始めで、4回世代を繰り返す。
- （3）ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

- ・「予報の根拠」は、巡回調査の結果、天候、フェロモントラップや予察灯への誘殺状況、指導機関からの情報等、「予報内容」で示した発生量や発生時期の予測の根拠となった事項を記載しています。
- ・文中の（-）、（+）は、予測される発生量に影響を及ぼすと考えられるもので、（-）の場合発生が少なくなると考えられる要因、（+）は発生量が多くなると考えられる要因を示しています。

- ・「発生生態及び防除上注意すべき事項」は、当該病害虫の生態、薬剤防除や耕種的防除法の留意事項、要防除水準等を示しています。

※ 病害虫防除については、病害虫防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

IV 短期暴露評価の実施に伴う農薬の変更登録について

農薬の登録にあたっては、これまで、残留農薬の摂取量について、一日摂取許容量(ADI)を超えなければ食品安全上問題ないものと判断されてきましたが、今般、急性参照用量(ARfD)を超えないかという点についても評価されること(短期暴露評価)となりました。

今後、現在登録を受けている農薬について、順次、急性参照用量が設定されるとともに、短期暴露評価が実施されることとなります。

この結果、登録内容が変更される場合、変更登録が申請された段階で、農薬メーカーから変更登録の内容(商品名、変更事項等)が発表されます。これらの農薬は変更登録前であっても、変更後の使用方法に基づいて使用するようになります。

1 使用方法が変更された農薬

有効成分 (変更年月日)	主な商品名	変更内容※
アセフェート (平成26年11月17日)	オルトラン水和剤、オルトラン粒剤、オルトランDX粒剤、 ジェイエース水溶剤、ジェイエース粒剤 スミフェート水溶剤、スミフェート粒剤 ジェネレート水溶剤、ジェネレート粒剤	適用作物削除 適用時期変更 使用回数変更 希釈倍率変更
ジメエート (平成27年2月4日)	ジメエート乳剤、ジメエート粒剤 ベジホン乳剤	適用作物削除
フルバリネート (平成27年2月18日)	マブリック水和剤20、マブリックEW マブリックジェット	適用作物削除 適用時期変更
フェナリモル (平成27年2月18日)	ルビゲン水和剤、スペックス水和剤	適用作物削除
NAC (平成27年2月18日)	マイクロデナポン水和剤85 デナポン水和剤50	適用作物削除

(平成27年6月9日現在)

2 今後使用方法が変更される予定の農薬

有効成分 (変更予定年月日)	主な商品名	変更内容※
シハロトリン	サイハロン水和剤、サイハロン乳剤、 ビリーブ水和剤	適用作物削除
カルボスルファン ベンフラカルブ (平成27年7月8日)	アドバンテージ粒剤、アドバンテージS粒剤、 ジャッジ箱粒剤、オンコルOK粒剤、オンコルスタークル粒剤、 オンコルマイクロカプセル、オンコル粒剤1、 ホームガーデン粒剤、オンコル粒剤5、 オンダイアエース粒剤、ガーデンホスピタル粒剤、 グランドオンコル粒剤、ガゼット粒剤	適用作物削除

(平成27年6月9日現在)

※ 変更の詳細については下記の農林水産省、農薬工業会(要登録)などのサイトで確認することができます。また、上記の有効成分の農薬を使用されている方は使用方法をご確認の上、使用していただきますようお願いいたします。

農林水産省：<http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>

農薬工業会：http://jcpa-seigen.jp/?page_id=5&reauth=1 (要登録)

詳しくは、京都府農林水産部食の安心・安全推進課のウェブサイト
(<http://www.pref.kyoto.jp/shokuanzenbosai/news/documents/tankibakurohyoka.html>) をご参照願います。

農業改良普及センター 電話番号一覧

・ 京 都 乙 訓	農業改良普及センター	0 7 5 - 3 1 5 - 2 9 0 6
・ 山 城 北	農業改良普及センター	0 7 7 4 - 6 2 - 8 6 8 6
・ 山 城 南	農業改良普及センター	0 7 7 4 - 7 2 - 0 2 3 7
・ 南 丹	農業改良普及センター	0 7 7 1 - 6 2 - 0 6 6 5
・ 中 丹 東	農業改良普及センター	0 7 7 3 - 4 2 - 2 2 5 5
・ 中 丹 西	農業改良普及センター	0 7 7 3 - 2 2 - 4 9 0 1
・ 丹 後	農業改良普及センター	0 7 7 2 - 6 2 - 4 3 0 8

農作物病害虫情報サービス

ホームページアドレス
<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/>

京都府病害虫防除所

〒621-0806 京都府亀岡市余部町和久成9

TEL 0771-23-9512

FAX 0771-23-6539

－ 農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること －